

古書のたのしみ（令和六年八月）

土屋 博

一「補註 源氏物語湖月抄 壹、貳、參、四」（全四冊）

（浪速國文館藏版、明治二十八年刊）

古書價格二千八百圓也。先月紹介したる積善館刊の八冊本（大正二年三十版）の輕裝とは全く異なり、明治期としては立派なる本格的製本の、極めて状態良き豪華美本なれば、小生にとり、一生の寶とこそなるらめ。なほ、NHKラジオ古典講讀に於いて、湖月抄による名場面を目下放送中（令和六年度）なれば、サブテキストとして最適と覺ゆ。



二「頭書 古今和歌集遠鏡 上下」

（發行者辻本九兵衛・小川寅松、杉原活版所、明治二十八年四版）

古書價格各百圓也。本書は何度目かの購入なれど、今回のもの最も状態良く、且つ廉價なり。

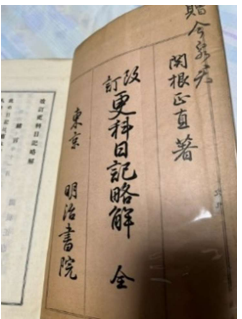
本居宣長の古今集口語譯なれば、何かと重寶す。



三「改訂 更科日記略解 全」關根正直著

(明治書院、明治三十三年刊、定價金參拾五錢)

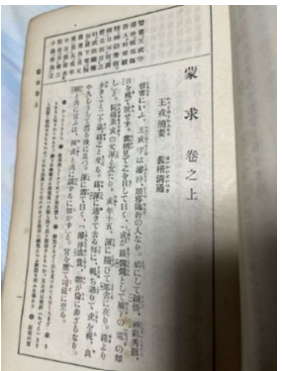
古書價格二百圓也。關根正直は、一八六〇年生れ、一九三二年歿。東京大學卒、學習院教授、女子高等師範教授、宮内省御用掛を歴任。冒頭の「更科日記年表」は梗概としても役に立つと思料。



四「漢文叢書 蒙求」

(有朋堂、大正八年刊、非賣品、六六六頁)

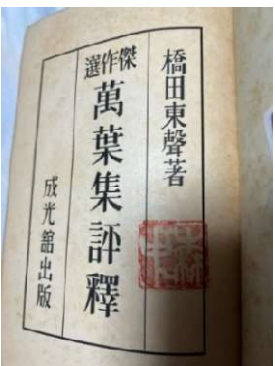
古書價格百圓也。天金。解題に曰く、「蒙求の書は、早く我が王朝時代に傳はり、徳川時代に盛んに行はれ、論語、孟子と共に書を読む者の必ず讀むべき書となれり」と。



五「傑作選 萬葉集評釋」橋田東聲著

(成光館、昭和八年刊、定價金壹圓八拾錢、三九二頁)

古書價格百五十圓也。古書に「森中文庫」のラベルあり、同志社の森中章光關聯藏書に賣り出されたるものと見ゆ。自序に曰く、「歌道の祕奥は『萬葉調』の會得にあり。」「萬葉調の會得は萬葉葉を精讀する外はない。」と。



六「古今集選釋」佐佐木信綱著

(明治書院、昭和九年三版、定價金貳圓、二七六頁)

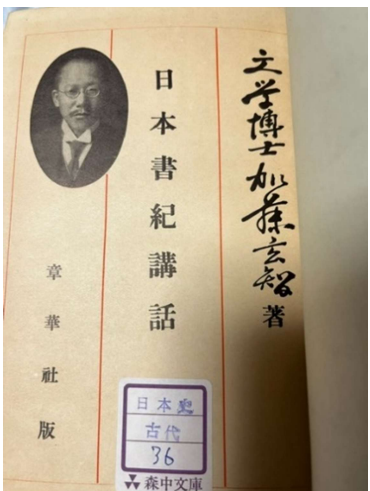
古書價格九百五十圓也。初版は昭和五年。「森中文庫」の藏書ラベル貼付せらる。序に曰く、「古今集の註釋はその數が多く、就中契沖の餘材抄、眞淵の打聽、宣長の遠鏡、ことに景樹の正義、また近くは金子氏の評釋などよいものが多いが、ここにはそれ等を参照して、専らすぐれた歌を採り、もしくは古今集の特色のある歌、また名高い歌をもぬきいで」云々。



七「日本書紀講話」文學博士加藤玄智著

(章華社、昭和十年刊、定價壹圓五拾錢、三〇八頁)

古書價格百五十圓也。「森中文庫」の藏書ラベルあり。



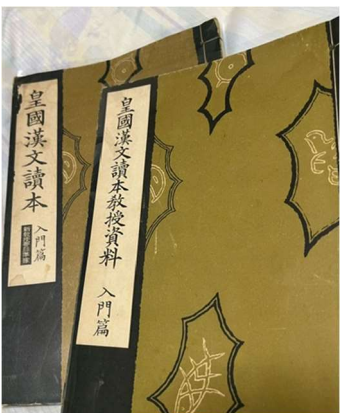
八「皇國漢文讀本 入門篇」大東文化協會編

(東京開成館、昭和十二年刊、定より價金參拾五錢、本文九八頁)

九「皇國漢文讀本教授資料 入門篇」大東文化協會編

(東京開成館、昭和十三年刊、本文二三〇頁)

古書價格各二百圓也。教授資料とセットなれば、獨習可能となるらむ。目次は、藤田東湖「日域三絶」、頼山陽日本外史「千瓢」、「元就幼時」、「泰時援弟」、「齋藤實盛」、「秀吉大志」、「家康言行」。大日本史「神器有歸」、「山部赤人」、日本書紀「寶祚無窮」。荻生徂徠「寄題豊公舊宅」、橋本左内「獄中作」など。



十「萬葉集」文部省藏版

(財團法人社會教育會、昭和十四年六版、

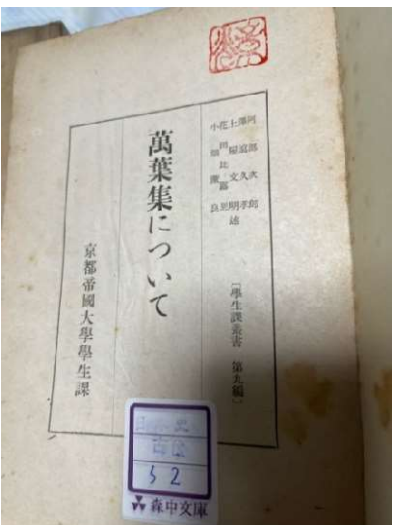
古書價格二百圓也。「森中文庫」の藏書ラベルあり。目次は第一編「神、國家、信仰、都、行幸」、第二編「女性、母性、夫婦、兄弟、思想」、第三編「自然、離別、羈旅」



十一「萬葉集について」京都帝國大學學生課編

(岩波書店、昭和十八年刊、定價壹圓四拾錢、特別行爲稅相當額四錢、二五三頁)

古書價格百圓也。「森中文庫」の藏書ラベルあり。學生課叢書第九編。阿部次郎「萬葉集の文化史的位置」、澤瀉久孝「萬葉歌調讚歌」、土屋文明「旅人憶良とその周圍」など、學内講演會の記錄なり。

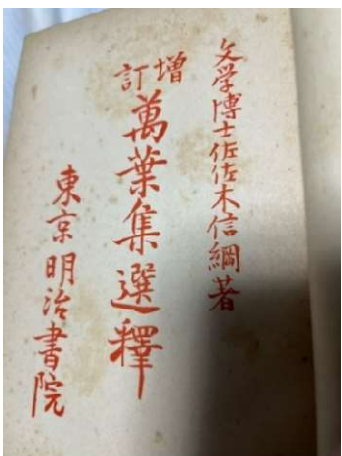


十二「増訂 萬葉集選釋」佐佐木信綱著

(明治書院、昭和二十六年四拾版、定價金參百參拾圓、五四二頁)

古書價格百五十圓也。本書の初版は大正十五年。「森中文庫」の藏書ラベルあり。序に曰く、「本書の前版は大正五年に印行したが、當時書肆より非常にいそがれた爲に粗漏な點が少なからず、絶版にしたいと思つて居たほどであつた。然るに大正十二年九月の大震災

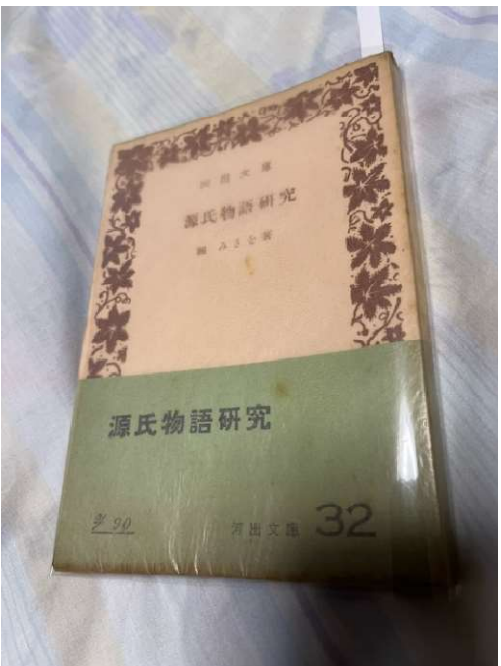
のために紙型が焼失したので、新たに百三首の釋を加へ全部に補正を爲してここに新版を
印行する運びとなつた」云々。



十三「源氏物語研究」關みさを著

(河出文庫、昭和二十九年刊、定價九拾圓、二三六頁)

古書價格二百圓也。藤原定家の源氏五十四帖各卷につき一首づつ讀みたる「源氏卷名歌」
は貴重。「一、桐壺のうち笑み顔のおも瘠せてをかしはづかし花鳥のこゑ」云々。



(令和六年九月十三日受附)

